参考：参加者の声
平成 26 年度アンケートより抜粋

- ＩＣＴはあくまで手段であり目的ではないことが理解できた（20 代 A 班）
- 不可能と思ってもまず提案して他者の提案と組み合わせることで実現の可能性が出た（20 代 A 班）
- グループ討議の意見のほとんどが業務改善につながるものだった（20 代 A 班）
- 改めて自分の大学の良い点、悪い点に気付くことができた（20 代 A 班）
- 学生が予習復習に取り組む事例が興味深かった（20 代 A 班）
- 問題意識を持って取り組むなど意識改革ができた（30 代 B 班）
- 他大学、他部署の方と話す機会がないため貴重な場であった（20 代 B 班）
- 多面的な視点から大学を再度捉える良い機会となった（20 代 B 班）
- 他部署や教員にも意識を向けて、学生が学びやすい環境をいかにつくれるかを考えて業務をすすめたい。（20 代 B 班）
- グループで様々な事例やアイデアが話され、自大学では思い浮かばない意見があったことが印象深い（20 代 C 班）
- 理想論から実際に解決方法を考えるプロセスについて３日間で経験できた（20 代 C 班）
- 日本の大学が置かれている立場の危険性を具体的に把握し、他大学と魅力のある取り組みを共有できた（20 代 C 班）
- 職員の大学における役割が非常に大きなものだと感じ、研修以外でも学びの姿勢を持っていきたい（20 代 C 班）
- 業務の目的・目標・手段を再確認・認識し、PDCA サイクルを回すことを意識した上で業務に取り組みたい（20 代 C 班）
- ＩＣＴに対する拒否反応を感じていたが、ハードルが低くなった（20 代 D 班）
- 問題点や改善点の共有により職員としてやらねばならないことが確認できた（20 代 D 班）
- 自ら考え、意見を持つ必要性を感じ、主体的な職員を目指したい（20 代 D 班）
- 他大学と協力して一つのものを創造する経験が良い機会となった（20 代 D 班）
- 他大学の自分と全く異なる部署の方との意見交換による交流がとても刺激的だった（20 代 D 班）
- 交流を通じていかに自大学が遅れをとているのか、甘さがあったかということに気付き、危機感を感じた（20 代 E 班）
- 参加者同士で向上心をみることができ、自大学でも一人ひとりの意識を高める努力の必要性を感じた（20 代 E 班）
- 討議を通じて、課題を見つけ出して協働することで課題を解決する良い経験になった（20 代 E 班）
- 大学間で協力して課題解決を考えることも一つの手段だと思った（20 代 E 班）
- 業務に流されていたが、入職した時にいろいろやりたいことがあったことを気付かされ刺激になった（30 代 F 班）
- LMS やポートフォリオなどを活用し、グローバル化やアクティブラーニングの取組みを働きかけていきたい（50 代 F 班）
- 建学の精神を確認し、業務の根底にもっていけるよう部署内で意識統一をしていきたい（30 代 F 班）
- 一定の教育レベルに到達させて卒業させることが、大学と学生の約束であるということが印象に残った（20 代 F 班）